

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22320138

研究課題名（和文） 朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相—漢江を中心として

研究課題名（英文） Historical Aspects of Society, Economy and Culture over 'Water Environment' in Korean Peninsula: Focusing Han River

研究代表者

六反田 豊 (ROKUTANDA YUTAKA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：40220818

研究成果の概要（和文）：朝鮮半島における主要河川の一つである漢江を主たる対象として、高麗および朝鮮時代において、人々が河川という「水環境」といかなる関係を築き、またそれがどのように変化してきたかを検証するために、関連資料の収集をおこなうと同時に、5回にわたり漢江流域での現地踏査を実施した。そして、その結果を、関連する文献情報とともに資料集にまとめて刊行した。また、日本国内の研究者と勉強会や意見交換の場をもち、「水環境」史研究の課題や方法についての認識を深め、朝鮮史研究における「水環境」史の構築のための研究基盤を形成した。

研究成果の概要（英文）：In order to verify what kind of relationship people built with rivers as "water environment" and how it changed in the Koryo and Chosun Era, focusing Han River which is one of the main rivers in the Korean Peninsula, We collected historical materials concerned with this subject, and did five times field survey in Han River basin. Moreover we arranged the findings of its survey with related historical materials, published as a sourcebook. In addition, we had opportunities of forums with researchers in Japan to deepen awareness on the subject and method of historical research of "water environment", and formed a basis for building history of "water environment" in Korea history study.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2011年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2013年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
年度			
総計	8,000,000	2,400,000	10,400,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東アジア史 朝鮮王朝 朝鮮時代 水環境 漢江

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の諸相に歴史学的観点から接近しようとするものである。ここでいう「水環境」とは、海洋・湖沼・河川など「水」

を基本的要素とする自然環境のことである。これらの「水環境」は、食料採取・生産の場としてはもちろん、ヒトやモノの移動・流通のための通路として、あるいは信仰や娯楽の対象として、歴史上、人間の生活にとって欠

くべからざる存在であり続けてきた。

従来、朝鮮史研究ではこのような研究課題に対して正面から取り組んではこなかった。日本国内においてはもちろん、韓国の歴史学界においてもそうである。経済史や交通史の立場から水運や渡船などを主題に据えた研究はこれまでもいくつかなされてきたが、その数は決して多いとはいえない。しかもそれぞれ問題意識を異にし、相互に孤立している印象が強い。歴史のなかでヒトが「水環境」といかに向き合ってきたか、あるいは、ヒトが「水環境」とどのような関係を築いてきたか、そしてそれらはどのように変化してきたのか、といった点に関する問題関心は、これまでの朝鮮史研究ではきわめて希薄だったといわざるをえない。

ところで、ヒトをとりまく「水環境」のなかでも、かつて河川はとりわけヒトとの関係が密接な存在だった。しかし近代化の過程においてヒトと河川との関係は急速に変化し、失われてしまった。鉄道や道路の開通により、かつては物流の中心だった河川水運が一気に衰退してしまったのはその一例である。本研究の分担者でもある森平雅彦は、こうした状況を「ヒトと河川との断絶」と呼ぶ。

かつてヒトは河川とどのような関係を築いており、それがどのようにして「断絶」とさえ呼びうるような急激な変化を生じることになったのか。その過程と歴史的背景を明らかにすることは歴史学研究の重要な課題といえよう。本研究が「水環境」のなかでもとくに漢江という河川を主要な対象とするに至った理由の一つがここにある。

しかも本研究の必要性を痛感するに至った大きな理由として、韓国における急速な河川開発の進行という現実がある。すなわち韓国では、李明博大統領（当時）の主導により、経済振興と環境保護を謳った、いわゆる「四大河川再生事業（4 대강 살리기 사업）」が2009年度から開始された。その結果、事業の対象とされた漢江・洛東江・錦江・榮山江では大規模な河川改修と開発が急ピッチで進められることになった。

それ以前の河川改修やダム建設等の結果、すでに多くの改変が加えられてきた韓国の主要河川は、この大規模開発によりさらに急激に変容し、かつて存在していた「水環境」はその痕跡すら失われていく可能性がある。この機会を逃せば朝鮮半島におけるヒトと「水環境」の伝統的なつながりのありさまを記録に留めることは二度とかなわなくなるかもしれないという緊急性と、それがヒトと河川との関係およびその変容の過程を研究するうえで重要な契機になると考えたことが、本研究に着手する大きな動機となった。

## 2. 研究の目的

本研究課題が究極的に目指すところは、朝鮮半島においてこれまでヒトが「水環境」といかに向き合い、どのような関係を築き、そしてそれがどのように変化してきたのかを、社会・経済・文化の諸相にわたって歴史学的に解明することにある。つまりそれは、朝鮮半島における「水環境」史の構築である。

しかしながら、上述のごとくこれまでの朝鮮史研究においてはこうした問題意識に立脚した研究はほとんどなされてこなかったのであるから、「水環境」史なるものが一朝一夕にして構築できるはずもないことはいうまでもない。本研究は、将来的に「水環境」史の構築を展望しながら、その基礎となるべき史料の蒐集と整理を進めることと、実際に現地を踏査し、現に存在する「水環境」の歴史的景観といままさに進行中であるその変容の姿を記録に留めることを第一の目的とした。そして、さまざまな「水環境」のなかでもとくに河川を対象として取り上げることとした。その理由についてはすでに述べたとおりである。

ところで、ひとくに河川といってもその数は多い。朝鮮半島における主要河川としては、上記「四大河川再生事業」の対象とされた漢江・洛東江・錦江・榮山江のほか、現在は北朝鮮の領域に入っている臨津江・礼成江・大同江、清川江、そして朝鮮と中国ないしロシアとの国境をなす鴨綠江・豆満江などをあげることができる。これらの河川はそれぞれに地域的・歴史的個性を持ち、研究対象として魅力的な存在ではあるが、限られた研究期間内に一定の成果をあげることが求められている以上、対象を限定する必要がある。

現状では韓国内の河川でなければ現地踏査はまず不可能である。しかもそもそも本研究の着手を思い至った理由の一つは、上述のごとく韓国における「四大河川再生事業」の進行だった。これらのことから、必然的に韓国内の主要河川が対象とされることになった。そのなかでもとくに漢江を選択したのは、この河川が朝鮮時代（1392-1910）において首都である漢城と朝鮮半島中部以南の地域とを結ぶ大動脈として機能したこと、それゆえ他の河川に比べて多くの文献史料が残されていること、などによる。

かくして本研究では、朝鮮半島における「水環境」のなかでもとくに河川環境に焦点を合わせ、具体的には漢江を主たる研究対象として、この河川とヒトの関係およびその変化を社会・経済・文化の諸側面から歴史学的に明らかにするための基礎的作業—関連史料の蒐集・整理と現地踏査—をおこなうことを、めざすべき目的とすることにした。

## 3. 研究の方法

上述のごとく、本研究の目的は漢江に関す

る「水環境」史関連の史料蒐集・整理と現地踏査である。なかでも、現地踏査を本研究における最大の“目玉”に位置づけた。そのために、与えられた研究期間である3年間に漢江の河口部から上流部（今回はひとまず船舶の遡航可能区間の上限）に至る「水環境」関連の史跡や景観を可能なかぎり綿密に踏査することとした。

初年度である2010年度と翌年度の2011年度には夏季と冬季の年2回踏査を実施することとした。最終年度である2012年度は、成果の取りまとめにある程度の時間を要することが見込まれたので、現地踏査は夏季の1回のみとした。以上を合計すると研究期間内に計5回の現地踏査を実施することとした。

現地踏査にさいしては、事前に関連文献を蒐集し、そこから踏査地を選択するとともに、文献で確認できる情報を整理することとした。踏査対象とした「水環境」関連史跡等は、おもに朝鮮時代から20世紀初頭にかけての時期における渡船場・川港・漕倉・水站などのほか、現在も利用されている漁場や、水利のための取水施設、さらには瀬・淵などの自然景観にまでおよぶ。また実際に現地踏査に赴いたさいには、その歴史的景観を写真および文章の形で記録にとどめるとともに、近隣の住民からも適宜聴き取りを実施することとした。

以上のような現地踏査と並行して、国内の関連研究者との間で勉強会や意見交換の機会を設け、また日本国内の河川を対象とした巡見もおこなうこととした。こうした活動をも研究の一環に加えたのは、一つには、すでに多くの研究蓄積を有する日本の「水環境」史の成果に学ぶことで、研究の問題意識や問題関心を共有するとともに、研究手法を錬磨するためである。また一つには、比較の視点を養いたいと考えたからでもある。

このほか、本研究課題の研究の進展状況を踏まえつつ、研究代表者および研究分担者それぞれ次のような個別の研究課題について実証的な研究を進めることとした。

六反田豊：朝鮮中世・近世の河川水運・物流研究

森平雅彦：『入峽記』を通じた漢江の社会史・生活史研究

長森美信：朝鮮近世の河川・内陸水面の歴史地理学的分析

石川亮太：朝鮮近世末期・近代移行期の河川の経済史的研究

#### 4. 研究成果

本研究課題の“目玉”でもあった漢江における現地踏査は、研究期間中に計画通り5回実施した。踏査の日程と各回の踏査地域には次のとおりである。

第1回 漢江本流・南漢江中流（2010年9月

11日～15日）

踏査地：ソウル・河南・南楊州・楊平・驪州

第2回 南漢江上流部・蟾江（2011年3月15日～20日）

踏査地：原州・忠州・堤川・丹陽・寧越

第3回 北漢江・昭陽江・漢江本流（2011年9月15日～19日）

踏査地：南楊州・楊平・加平・春川・華川・麟蹄・高陽・金浦

第4回 南漢江中・上流（2012年3月16日～20日）

踏査地：驪州・原州・忠州

第5回 南漢江上流（2012年8月13日～17日）

踏査地：丹陽・寧越・旌善

これらの現地踏査により、上流部はアウラジ・ナル（ナルは朝鮮語で渡し場のこと。江原道旌善郡）から河口部は祖江渡（京畿道金浦市）に至るまで、漢江水系に属する南漢江・北漢江・昭陽江・漢江本流（南漢江・北漢江合流点より下流部）の大部分における主要な「水環境」関連史跡等を実見することができた。同一地を複数回にわたって踏査しているのは、季節の違いによる水量の変化を確認するためである。

漢江の渡船場や川港・水站・漕倉等については、これまでもおもに韓国人研究者による民俗調査や現地踏査がなされ、その成果が公刊されてはいる。しかし、それらはいずれも漢江水系の一部に限られていた。これに対し、本研究における現地踏査は、上流部から河口部に至るまでの漢江の流域全体にわたって「水環境」史関連史跡等を包括的に踏査したものであり、こうした踏査は管見の限りこれが嚆矢であると思われる。

むろん、限られた期間内における、しかも外国人による踏査の結果である以上、網羅的なものとは決していえないだろう。その点は十分認識しているが、それでも漢江流域を広範囲にわたって実際に歩いたことは、ある種の“土地勘”を養ううえでも意義深いものだった。と同時に、「四大河川再生事業」により漢江の「水環境」が劇的に変化していくさまを直接確認することができた点でも有益な踏査となった。

踏査の結果は、それぞれの「水環境」史関連史跡ごとに、それに関連する文献史料の情報をも付加して、その現状と歴史的経緯を整理した資料集として刊行した。六反田豊・森平雅彦・長森美信・石川亮太『漢江流域における「水環境」史関連史跡等踏査資料集』（私家版、2013年3月、208頁）がそれである。これが本研究課題における最大の成果物である。

次に、日本国内における勉強会・意見交換・巡見等としては、次のようなものを実施した。

第1回 滋賀県大津市・草津市等（2010年12月18日～20日）

琵琶湖の水運・漁撈関連の史跡を巡見したのち、滋賀県立琵琶湖博物館との共催で、同博物館において共同ワークショップ「東アジアの「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相」を開催した。本研究課題の研究代表者・研究分担者と琵琶湖博物館の研究者がそれぞれ研究発表をおこない、意見交換の場をもった。

第2回 佐賀県佐賀市・福岡県久留米市等（2011年6月11日～13日）

佐賀大学附属図書館を会場にして、同大文化教育学部准教授の永島広紀氏をゲスト・スピーカーに招いて筑後川水系の水利問題等に関する勉強会を開いた。その後、筑後川流域の水利施設や水運関連史跡等を巡見した。

第3回 東京都文京区（2012年6月10日）

東京大学文学部を会場にして、日本と朝鮮の「渡し」に関する勉強会を開催した。江戸東京博物館学芸員の齋藤慎一氏に「中世における関東平野の渡河」という題目で研究発表をしていただくとともに、本研究の側からは研究分担者の長森美信氏が「朝鮮時代の津渡—漢江流域を中心に—」という研究発表をおこない、その後、意見交換の場をもった。この研究会は朝鮮史専攻の大学院生にも公開した。

第4回 岡山県新見市・高梁市等（2013年3月9日～11日）

朝鮮半島の河川水運との比較研究のために、岡山県の高梁川水運に関連する史跡を巡見し、現地での聴き取りと関連史料の収集をおこなった。

以上のような国内での勉強会・意見交換・巡見等は、研究手法の錬磨や比較の視点を得るうえでおおいに資するところがあっただけでなく、研究のネットワークづくりという点でも一定の成果をあげることができた。

次に、最終年度である2012年度には、韓国・朝鮮文化研究会の例会の場を借りて、研究取りまとめのためのミニシンポジウム「漢江を考える—朝鮮半島における「水環境」史構築をめざして」を開催した。研究の成果と今後の課題について研究代表者・分担者がそれぞれ報告をおこない、それをもとに韓国・朝鮮文化研究会の会員諸氏と意見交換をおこなった。

本研究の全体的な成果はおおよそ以上のとおりである。このほか、関連史料の蒐集や現地踏査の成果を踏まえつつ、本研究の研究代表者・分担者はさきに掲げた個々の課題に

ついても研究を進めた。本研究の期間中に論文の形で公表するに至ったものはそれほど多くないが、「水環境」史的観点から朝鮮後期における漢江の舟運の行程や操船技術などの問題に接近した森平雅彦の論文など、いくつかの成果を世に問うことができた。

とはいえ、3年間の研究期間はあまりに短く、今回は文字どおり、研究の基盤作りに終始した感は拭えない。現地踏査においても踏査対象地の大半は水運・物流関係の史跡等であり、治水や魚食文化、河川をめぐる信仰に関しては十分な調査ができなかった。今後、問題関心を同じくする研究者（歴史学のみならず、文化人類学や民俗学など関連分野も含めて）との連携を深めながら、さらに研究を進展させていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 森平雅彦、「朝鮮後期における漢江舟運の運航実例から：「朝鮮半島の水環境とヒトの暮らし」に関する予備的考察(1)」、史淵、査読無、150輯、2013、pp.1-53  
<http://hdl.handle.net/2324/26233>

〔学会発表〕（計12件）

- ① 森平雅彦、朝鮮後期の漢江水運とその技術：「生態環境の朝鮮史」のための予備的考察、2010年12月12日、九州史学会平成22年度大会、九州大学
- ② 六反田豊、朝鮮時代初期漢江の水站制度とその機能、共同ワークショップ「東アジアの「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相」、2012年12月19日、滋賀県立琵琶湖博物館
- ③ 森平雅彦、『蘭湖漁牧志』にみる朝鮮時代の淡水魚食、共同ワークショップ「東アジアの「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相」、2012年12月19日、滋賀県立琵琶湖博物館
- ④ 長森美信、朝鮮時代漢江の津渡、共同ワークショップ「東アジアの「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相」、2012年12月19日、滋賀県立琵琶湖博物館
- ⑤ 石川亮太、朝鮮開港期国内航運問題：1893年の中国人による漢江航路開設、共同ワークショップ「東アジアの「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相」、2012年12月19日、滋賀県立琵琶湖博物館
- ⑥ 石川亮太、The Commercial Networks of Tong Shun Tai(同順泰) in the Late Nineteenth Century、Conference on Business Documents & Transnational Business、2011年6月28日、Hong Kong

Institute for the Humanities and Social Sciences, the University of Hong Kong

- ⑦石川亮太、20世紀初頭の朝中貿易—華商の活動を中心に、東アジア近代史学会シンポジウム「辛亥革命と東アジア」、2011年10月29日、福岡市エルガーラーホール
- ⑧森平雅彦、朝鮮史における「水環境」とヒトの暮らし、朝日カルチャーセンター・九州大学文学部連携講座「新しい共同性を求めて」、2012年6月16日、朝日カルチャーセンター福岡教室
- ⑨六反田豊、朝鮮時代漢江の国家的水運機構と水運拠点、韓国・朝鮮文化研究会第43回研究例会・ミニシンポジウム「漢江を考える：朝鮮半島における「水環境」史構築をめざして」、2013年2月2日、東京大学
- ⑩森平雅彦、朝鮮人と川魚—朝鮮時代を中心に、韓国・朝鮮文化研究会第43回研究例会・ミニシンポジウム「漢江を考える：朝鮮半島における「水環境」史構築をめざして」、2013年2月2日、東京大学
- ⑪長森美信、前近代朝鮮の地誌・地図に見る河川—朝鮮時代の漢江を中心に、韓国・朝鮮文化研究会第43回研究例会・ミニシンポジウム「漢江を考える：朝鮮半島における「水環境」史構築をめざして」、2013年2月2日、東京大学
- ⑫石川亮太、20世紀前半における漢江の水上交通—渡船を中心に、韓国・朝鮮文化研究会第43回研究例会・ミニシンポジウム「漢江を考える：朝鮮半島における「水環境」史構築をめざして」、2013年2月2日、東京大学

[図書] (計2件)

- ①原尻英樹、六反田豊、外村大、明石書店、『日本と朝鮮—比較・交流史入門—近世、近代そして現代』、2011、354頁 (pp.47-101)
- ②六反田豊、森平雅彦、長森美信、石川亮太、私家版、『漢江流域における「水環境」史関連史跡等踏査資料集(稿)』、2013、208頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

六反田 豊 (ROKUTANDA YUTAKA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教

授

研究者番号：40220818

### (2) 研究分担者

森平 雅彦 (MORIHIRA MASAHIKO)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：50345245

長森 美信 (NAGAMORI MITSUNOBU)

天理大学・国際学部・准教授

研究者番号：50412135

石川 亮太 (ISHIKAWA RYOTA)

立命館大学・経営学部・准教授

### (3) 連携研究者

なし